

朔東という語彙は小生の造語であると思っておりましたが、ある人から若干の疑義を表されたので、調べてみました。そしたら、「朔東」という言葉がありました。それを紹介します。

「列子」の「湯問篇」に「愚公 山を移す」という物語に「朔東」が在りました。

原文では以下のようになっております。

「太行、王屋二山，方七百里，高萬仞。本在冀州之南，河陽之北。北山愚公者，年且九十，面山而居。懲山北之塞，出入之迂也，聚室而謀曰：吾與汝畢力平險，指通豫南，達于漢陰，可乎？雜然相許。其妻獻疑曰：以君之力，曾不能損魁父之丘，如太行王屋何？且焉置土石？雜曰：投諸渤海之尾，隱土之北。遂率子孫荷擔者三夫，扣石墾壤，箕畚運于渤海之尾。鄰人京城氏之孀妻，有遺男，始龀，跳往助之。寒暑易節，始一反焉。河曲智叟，笑而止之，曰：甚矣，汝之不惠。以殘年餘力，曾不能毀山之一毛，其如土石何？北山愚公長息曰：汝心之固，固不可徹，曾不若孀妻弱子。雖我之死，有子存焉；子又生孫，孫又生子；子又有子，子又有孫。子子孫孫，無窮匱也。而山不加增，何苦而不平？河曲智叟亡以應。操蛇之神聞之，懼其不已也，告之于帝。帝感其誠，命夸娥氏二子負二山，一厓朔東，一厓朔南。自此，冀之南，漢之陰，無隴斷焉。」

(<http://aonoken.osaka-gaidai.ac.jp/~aono/3bunkatu.htm>)

この意味は、次の通りである。愚公、山を移すというのは、『列子』の「湯問」編に出てくるつぎのような物語である。「太行、王屋の二山は七百華里四方で、高さは万仞もある。もと冀州の南、阿陽の北にあった。北山の愚公というひとは、もう九十に近い年であったが、その住まいが山に面していた。山の北側でふさがれているため、出入りのたびに遠まわりをするのに懲り、家族をあつめて、こう相談した。わしとお前たちが全力をあげて、山をほりくずし、これを平らにして、河南の南に通じ、漢水の北にも達するようにしたら、どんなものだろう、と。みなが口をそろえて、これに賛成した。妻が疑問をだし、こういった。あなたの力では魁父の丘さえつづすことができないのに、どうして、太行山と王屋山をほりくずせましょう。そのうえ、土や石をどこへやるのですか、と。みながこういった。それは渤海の底、隱土の北にすてればよい、と。そこで、子や孫など運ぶもの三人をひきつけて、石をわり、土をほりくずし、箕(み)や畚(もっこ)で渤海に運びはじめた。隣人京城氏のやもめ婆さんに息子がおり、乳歯が抜けかわったばかりの年頃であったが、かけつけてきて、これに協力した。寒暑の季節もあらたまったとき、ようやく一度往復した。河曲の智叟がこれを笑い、思いとどませようとして、こういった。なんてまあお前さんは馬鹿なんだろう。年寄りの力では、山の雑木一本だって折れはしないのに、どうして、土や石がほりくずせるものかね、と。北山の愚公は長いため息をついて、こういった。お前さんときたら、まったく手がつけられないほどの石あたまだね、やもめ婆さんやひよわい子どもよりもまだ物わかりがわるいよ。わたしが死んだとて、息子がいるし、息子はまた孫をうみ、孫はまた子どもをうむ。その子にはまた子どもができ、子どもにはまた孫ができる。このように、子子孫孫、無限につづいてゆくが、山はふえることはない。ほりくずせないなんて心配をする必要がどこにある、と。河曲の智叟は返すことばがなかった。操蛇の神がこれをきき、そのねばりづよい努力におそれをなして、これを上帝に

つげた。上帝はそのまごころに感動し夸娥氏の二人の子に命じて二つの山を背負わせ、一つを朔東に移し、一つを雍南に移させた。これからのち、冀州の南、漢水の北には交通をさまたげる丘陵はなくなった。」

(<http://www5.big.or.jp/~jinmink/toukou/rousan/tyuu.html>)

良い造語だと良い気になっていましたが、……。先人は偉いですね。

で、高さは万仞もある。もと冀州の南、阿陽せんじんの北にあった。北山の愚公というひとは、もう九十に近い年であったが、その住まいが山に面していた。山の北側でふさがれているため、出入りのたびに遠まわりをするのに懲り、家族をあつめて、こう相談した。わしとお前たちが全力をあげて、山をほりくずし、これを平らにして、河南の南に通じ、漢水の北にも達するようにしたら、どんなものだろう、と。みなが口をそろえて、これに賛成した。妻が疑問をだし、こういった。あなたの力では魁父の丘さえつづすことができないのに、どうして、太行山と王屋山をほりくずせましょう。そのうえ、土や石をどこへやるのですか、と。みながこういった。それは渤海の底、隠土の北にすてればよい、と。そこで、子や孫など運ぶもの三人をひきつれて、石をわり、土をほりくずし、箕（み）や畚（もっこ）で渤海に運びはじめた。隣人京城氏のやもめ婆さんに息子がおり、乳歯が抜けかわったばかりの年頃であったが、かけつけてきて、これに協力した。寒暑の季節もあらたまったとき、ようやく一度往復した。河曲の智叟がこれを笑い、思いとどませようとして、こういった。なんてまあお前さんは馬鹿なんだろう。年寄りの力では、山の雑木一本だって折れはしないのに、どうして、土や石がほりくずせるものかね、と。北山の愚公は長いため息をついて、こういった。お前さんときたら、まったく手がつけられないほどの石あたまだね、やもめ婆さんやひよわい子どもよりもまだ物わかりがわるいよ。わたしが死んだとて、息子がいるし、息子はまた孫をうみ、孫はまた子どもをうむ。その子にはまた子どもができ、子どもにはまた孫ができる。このように、子子孫孫、無限につづいてゆくが、山はふえることはない。ほりくずせないなんて心配をする必要がどこにあらう、と。河曲の智叟は返すことばがなかった。操蛇の神がこれをきき、そのねばりづよい努力におそれをなして、これを上帝につげた。上帝はそのまごころに感動し夸娥氏の二人の子に命じて二つの山を背負わせ、一つを朔東に移し、一つを雍南に移させた。これからのち、冀州の南、漢水の北には交通をさまたげる丘陵はなくなった。」